

やはり俺の魔本はまち
がっている

ポンたん

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

あ……ありのまま今起こったことを話すぜ！

俺はいつもどおり、休日ボツチライフを満喫していたんだ……

だが、突然何の前触れもなく、その平和な日常は口から電撃を吐く子どもによって破壊されたんだ！

な、何を言っているのかわからねーと思うが………マジでなんなのこれ？

いや、本当にマジで勘弁してください。

赤い本とか不思議な術とか、どう考えてもこれ合っていないからね。
俺別に天才見じゃないから。

目次

ブリの眼と八幡

—
1

ブリの眼と八幡

休日。

リア充たちは、やれ遊びだ部活だと忙しい時間だろう。

だがちよつと待て。

——それ休めてないだろ。

休日とは、就業規則や労働基準法に基づいて与えられるものを指し、休暇は勤務日と定められた日に使用者の許可を得て、または労働者が指定して休むことを指す。

つまり休日とは本来、次の勤労に備えて体力を回復するための期間であり、身体を動かすなど本末転倒に等しい。

八幡「つまり、こうしてくつろいでいる姿こそ、真に休日を満喫していると言える」

小町「まあーたこのごみいちゃんは……日曜日の昼間つからリビングでゴロゴロして……小町的にポイント低いなあ」

妹の小町が我が家のペットのカマクラと遊びながらそんなことを言うが、俺はそんなことで動いたりしない。

小町「あ、そういえばお父さんがうちで子ども預かるって言ってたよ?」

八幡「なにそれ初耳」

小町「お兄ちゃんには当日まで言うなって、お父さんとお母さんに言われてたから。ほら、なんか追い返そうと画策するんじゃないかって」

八幡「当然だろ。今のこの家は俺と小町の愛の巣だ。何人たりとも寄せつけねえ」

小町「うわあー……流石にそのシスコン発言は引いちやうなあ……」

八幡「とにかくさっさと今から来るであろうガキをさっさと——」

小町「それじゃ、小町はこれから晩御飯の買い物行くからお兄ちゃんはお留守番しててねー」

俺の言葉を遮り、すぐさまリビングから飛び出していく小町。

八幡「……逃げるの早い」

言い逃げ、ダメ、絶対。

八幡「はあ……マジかよ……マジで見ず知らずのガキがうちにやってくんのお？」

考えただけでも気が滅入る。

俺の聖域が、そんなどこの馬の骨ともわからん輩に侵されるなど言語道断。

——ピンポーン

八幡「あ？」

インターホンが鳴ったので、玄関へと向かう。
宅配便かと思い、玄関の扉を俺は開く。

そしてそこには、金髪の子どもが、何故か背中にブリを背負って立っていた。

？「お主が比企ヶ谷八幡だな！」

八幡「比企ヶ谷は隣だ」

——ガチャーンツ

八幡「……見なかったことにしよう」

なんだよあのガキ、なんでブリ背負ってるの？

あの状態で街中歩いてきたの？

どういう神経してんだよ？

——ピンポーン、ピンポーンピンポーンピンポーン!!

八幡「……………」

——ガチャ

？「お隣は鈴木さんであつたぞ！ やっぱり比企ヶ谷はこちらではないか！」

八幡「いや、そつちじゃなくて反対の隣なんだよ」

？「そっちは加藤さんであつたぞ！」

もう行つたのかよ。

？「ウヌ………ちよつと待つのだ」

その子どもは、急に背中にしよつていたブリを前に持ち直す。

？「………ウヌツ、やはりお主が八幡だなつ」

八幡「ちよつとまで、今お前そのブリの眼と俺の眼を比較したよな？
なんだ、何を
確かめた？」

？「こつちの方が新鮮で美味そうなのだつ」

初対面の子供に、遠回しに目が腐った魚みたいだと言われた。

? 「我が名はガツシユ・ベル! 八幡の眼を治すようご両親に頼まれて来たのだ!」



——八幡へ。

前略、お前の眼が腐っているから、真つ直ぐな目をしたその子どもを見習いなさい。

P・S

その子どもは記憶喪失らしく、身元がまったくわからなかった。

唯一の手がかりと思われる本も何が書いてあるのかわからず、結局手がかりにはならなかった。

その子は他に行く宛がなくこちらで面倒を見ようと思っただが今は忙しいので、そつち生活させることにした。

八幡「P・Sの使い方間違ってるだろ……」

ガツシユ「ウヌ、や、やめるのだ！ それはわたしのブリなのだー！」

カマクラ「ふしやー！」

カマクラ相手にブリを奪い合いつているこのガキがそれほど深刻な状況にあるとは思えないんだが……

八幡「……で、これが例の本か」

唯一の手がかりというこの赤い本。

軽く開いて見た。

八幡「うつわ……何書いてあるのかさっぱりわかんねえ……材木座辺りが好きそうだな……ん？」

ページをめくっていると、色の違う文字があった。

まったく知らない文字のはずなのに、その部分だけは理解できる。

「……なにになに？ ……第一の術…… “ザケル”」

——バチンツ

カマクラ「ふぎや!!」

何か妙な音が聞こえたと思ったら、急にカマクラがその場から飛び上がってリビングから逃げて行った。

八幡「……………」

ガツシュ「…………ウヌ？ ……………あー！ わたしの、わたしのブリが黒焦げになってるのだー！」

………待て。

待て待て待て待て待て。

今、このガキ……ガツシユの奴、口から電撃を吐き出さなかつたか？

八幡「………疲れてるんだな。うん。寝よう」

今のは夢だ。

目を覚ませばきつと、いつものように小町と俺だけの聖域に戻っているはずだ。

ガツシユ「八幡、お腹が減ったのだっ」

八幡「ブリ食っただろ？」

こいつは俺を夢の世界に旅立つことすら許さないのか？

ガツシユ「何故か急に黒焦げになってしまつて食べられないのだ」

八幡「いや、それはお前が………いや、きっと俺の見間違いだ。とにかく小町が帰つてくるのを待て。なんかお前の為に御馳走作ってくれるらしいぞ」

ガツシユ「ウヌ………しかし、わたしはまだ朝ご飯もお昼御飯もまだなのだ」

——きゅーぐるるるる——…

八幡「………ちよつと待つてろ。財布取つてくる」